

# 鞍部に築かれた墳墓試論

福島孝行

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



# 鞍部に築かれた墳墓試論

福島孝行

## 1 はじめに

筆者は丹後・但馬地域を中心に、周辺地域に点在する卓状墓及びその発展形である金谷型台状墓について、特徴や分布、変遷過程などを分析してきた<sup>(注1)</sup>。しかし、実ははっきりと言及してこなかった問題が残っている。それは丘陵鞍部に築かれている墳墓についてである。卓状墓は立地場所により丘頂型と尾根上型に分類できるが、尾根上型は、傾斜のある尾根に立地するものであり、ほぼ水平な鞍部に立地する墳墓は含まない。

今回は鞍部(ほぼ水平な尾根上から傾斜する尾根の、水平な部分を含む)に立地するものの事例を紹介し、検討する。検討範囲は丹後・但馬・丹波地域とする。

## 2 事例紹介(図2)

### (1)与謝野町明石大師山古墳群D10東地点<sup>(注2)</sup>

この墳墓は、明石大師山古墳群最高位に位置するD11・12号墳から標高で約12m、平面的には西に30m程の距離に位置し、東西に30m程続く平坦地に立地する。加悦町教育委員会の報告によると、東端部SX13(中世墓か)付近の地山面の標高は82.2m前後だが、中央部のSX12付近から西側は81.1~81.2mでほぼ平坦と言っていい。なお、西端部は地表面に僅かな段差があることが図示されているが、SX01付近の地山面の標高が81.0mであることを踏まえると、同一の平坦面である公算が高い。主体部は、範囲確認調査という性格からトレンチ調査に留まっており、おそらく南北主軸の土壙墓ということが判明しているに過ぎない。ただし、SX04は東西主軸である可能性がある。副葬品は検出されておらず、調査範囲からは明確な供献土器は検出されていない。流土から出土した土器から弥生時代後期末~古墳時代前期前半に位置づけられる可能性が指摘されている。

### (2)京丹後市左坂古墳群G支群5号墳・6号墳<sup>(注3)</sup>

この古墳は、弥生後期の墳墓として著名な左坂墳墓群の東側に続く尾根上に位置する古墳群の、2号墳と7号墳に挟まれた鞍部に築造された古墳である。4号墳もこの鞍部に含まれるが、5・6号墳より50cm程高い位置に小規模な平坦面を造成し、尾根に対し直交

する主軸の主体部を築造しているため独立した尾根上型卓状墓と認定し、今回の検討からは外す。

5号墳は、尾根の主軸に平行する北東－南西主軸の主体部3基と尾根の主軸に直交する北西－南東主軸の主体部2基、合口の土器棺1基(北東－南西主軸)の6基の主体部で構成される。墳墓の北東端と南西端には尾根主軸に直交する溝が墳頂部からの比高で60cm掘り下げられている。第2と3、3と4、4と5主体部は墓壙の切り合いがあり、第1と6主体部は切り合いがない。中心主体部である第3主体部は、箱式石棺を用いており、3人の女性が葬られている。副葬品はガラス小玉2点。土器棺墓の土師器甕は筆者の丹後中期4式にあたり、5世紀後半から末の築造と見られる<sup>(註4)</sup>。

6号墳は5号墳の北東側に位置し、南西側の溝を5号墳と共有し、北東側も溝で切り離す。こちらも墳頂部との比高で60cm掘り下げられている。主体部は墳墓中央部に尾根主軸に平行して北東－南西方向に1基設けられている。6号墳に直接伴う遺物はない。

(3)福知山市豊富谷丘陵遺跡群大道寺(DD)19号墳・5～7号墳、狸谷(TD)18号墳<sup>(註5)</sup>

この遺跡群の内、大道寺古墳群は、丘陵頂部を占める大道廃寺から北東へ延びる尾根上に立地し、19号墳はその中でも最も高位側を占める。

19号墳は北西側と南東側を尾根の主軸に直交する溝で区切ったとされる(ただし南東側の溝は大道廃寺の堀切の底に残存すると報告されているが、平面図にはその表現はなく、

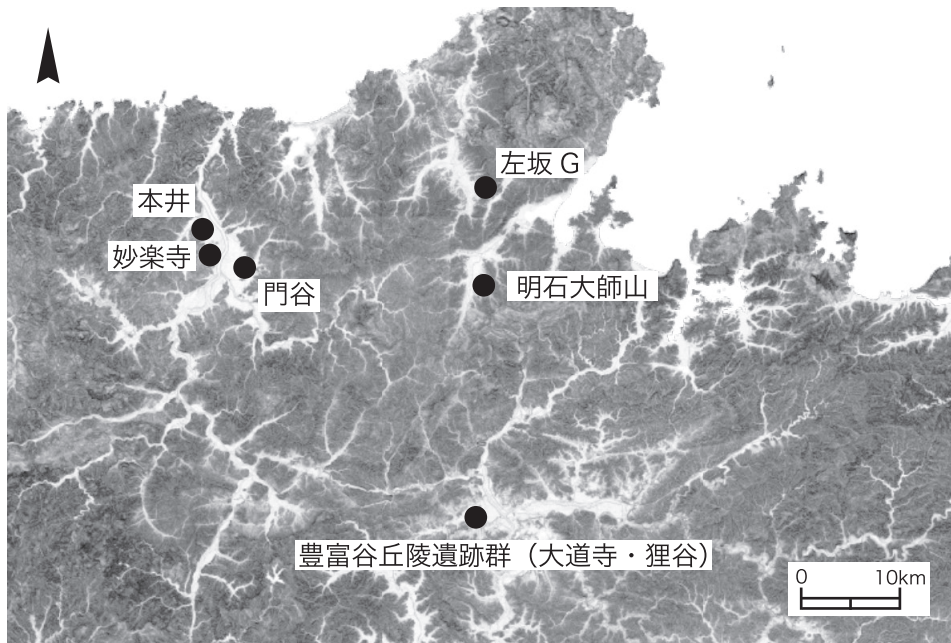


図1 鞍部に築かれた墳墓分布図

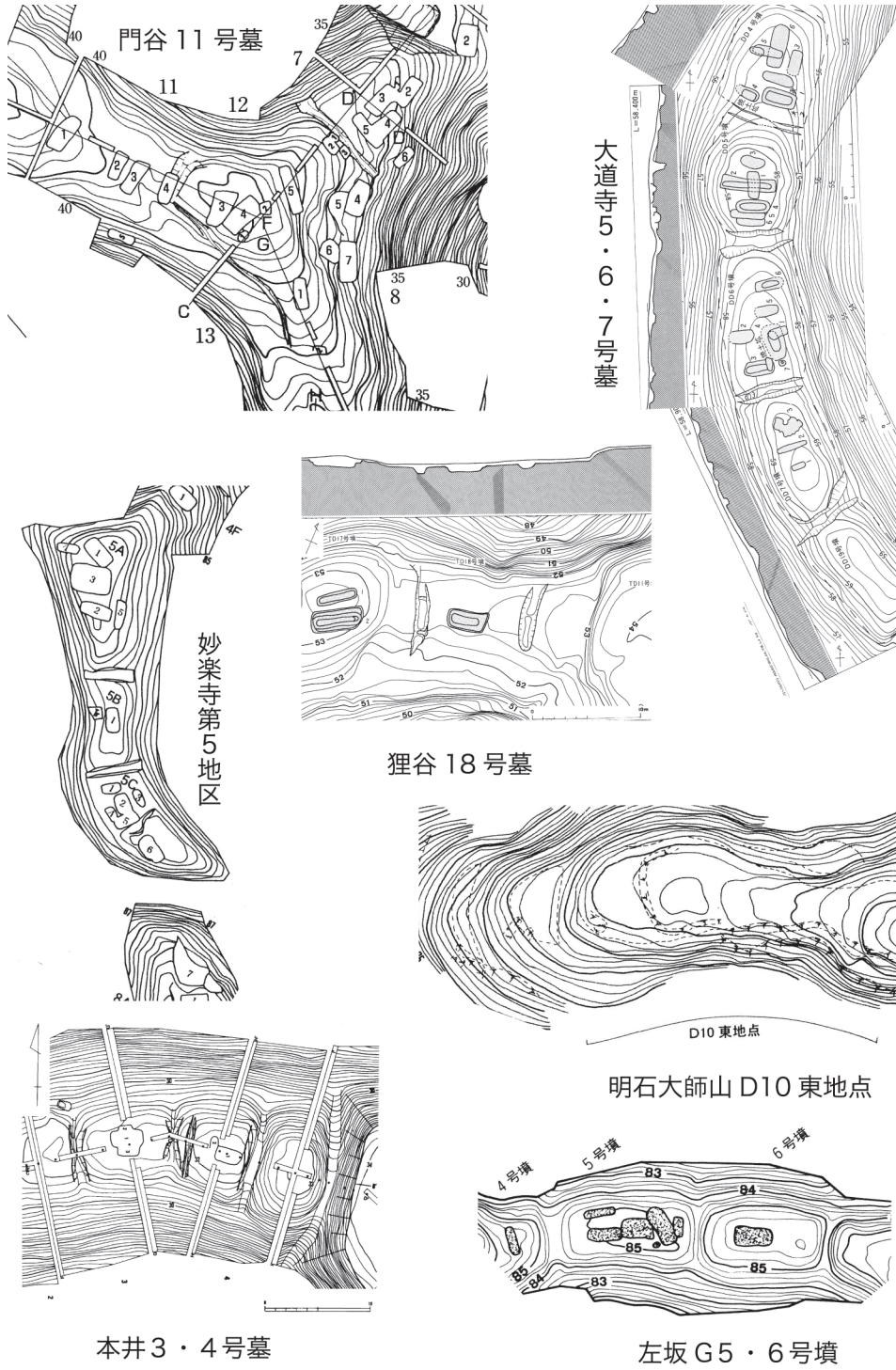


図2 鞍部に築かれた墳墓平面図

断面図が報告されていないため検証はできない)。また、北東側及び南西側の尾根主軸に平行する側縁部には盛土が施され、平坦面を造っていると報告されているが、これも土層断面図の報告がなく検証できない。さらに北東側及び南西側の尾根主軸に平行する側縁部の南端側は削り出しが行われており、自然地形との境界で基底部を確認できたと報告されているが、平面図に破線による基底部の推定線が書かれるだけで、土層断面・写真が報告されておらず、検証できない。埋葬施設は検出されていない。報告書は、古墳群が大道廃寺の墓地化した際に失われた可能性を挙げている。この古墳はそもそも古墳だったかどうか再検討の余地がある。

7号墳は、19号墳の北側に隣接する古墳で、19号墳の北限を限る溝を共有するが、19号墳側は直線的で、7号墳側は円弧を描くという違いがある。北側には6号墳と共有する溝が尾根主軸と直交して築かれている。こちらは直線的に穿たれている。平面図の等高線の読図及び写真図版によると北東側・南西側の尾根主軸に平行する側縁部は、南北2本の溝底に当たる部分で僅かに傾斜を緩め、基底部を造作しているかに見える。埋葬施設は尾根主軸に直交する3基である(報告者はこの内第3主体部を複数の埋葬施設による切り合いとしているが、尾根線に直交するやや長い主体部以外は中世以降の攪乱と見られる)。

6号墳は、7号墳の北側に隣接し、7号墳の北溝を共有する。墳丘側縁部は削り出しにより基底部に緩斜面状の平坦面を有すると報告されている。墳頂部には30cmから50cmの盛土が見られたと報告されている。平坦面上には7基の埋葬施設が設けられるが、この内第3～6主体部は地山から、第1・2主体部と土器棺墓が盛土上から穿たれている。

5号墳は、当初南北の溝により長方形に造成され、一部盛土を行っていたが、後世基底部を削平し、東・西の側面縁部に大量に盛土して楕円形にしていると報告されている。しかし、土層断面図の報告がないため検証できず、供献土器が庄内式平行期のものとTK47平行の須恵器杯身杯蓋に分かれるため、築造が少なくとも2時期に分かれることは間違いない。庄内式平行と見られる第3～6主体部は、全て尾根主軸に直交して築かれる。

狸谷古墳群は大道寺地区から東へ谷を2本挟んだ狸谷城跡が占地する丘陵尾根を中心に散在する古墳群である。狸谷18号墳は、その最高所である53～54mの2つのピークに挟まれた鞍部に立地している。

#### (4) 豊岡市本井墳墓群3号墳・4号墳<sup>(注6)</sup>

本井墳墓群は、豊岡市岩井に所在する西から東へ延びる丘陵尾根上に立地する。調査地の高位側に尼城跡の郭が存在し、墳墓群はその西側一段低い尾根上に立地する。

3号墳は尾根主軸に直交して築かれる2本の溝によって区切られ、尾根主軸に平行する側縁部には地形の変化は見られず、「自然地形のまま」と報告されている。平面図の等高

線の読図では、溝底のレベル付近から側縁部にかけて等高線間隔が広く見える部分もあるが、写真図版を確認すると、墳裾の平坦面は確認できない。したがって報告のとおり、自然地形のままである可能性が高い。墳頂部は僅かに削平された平坦面に埋葬施設を設ける。報告文では、第2、3主体部が第1主体部に伴う盛土から切り込まれるとしているが、土層断面図にそのような表現はなく、第20図によれば、地山の遊離土(花崗岩パイラン土か)から掘り込まれている。埋葬施設は中央部に木棺土壙墓、土壙墓、土器棺墓がそれぞれ尾根の主軸に平行に設けられ、木棺土壙墓を中心に墓壙を切り合うように設けられている。土器棺墓は山陰系の複合口縁壺で、青木Ⅶ期に比定される。

4号墳は、3号墳の東に隣接するが、溝は共有しない。西側は溝で区切られることが明らかであるが、東側は尼城跡の堀切により破壊され、不明である。尾根主軸に平行する側縁部には地形の変化がなく、自然地形のままである。墳頂部は僅かに削平された平坦面に木棺墓1基が尾根の主軸と平行に、土壙墓(埋葬施設でない可能性もある)1基が尾根主軸と直交して築かれている。第1主体部から墓壙内破碎土器供献の鉢が1点出土しており、弥生時代末期に比定されている。

(5)豊岡市妙楽寺墳墓群第5地点5A墓・5B墓・5C墓<sup>(注7)</sup>

妙楽寺墳墓群は、豊岡市妙楽寺に所在する南北に連なる丘陵上に立地する。

第5地点は最高所にある第7地点から北西に延びる尾根上、第7地点から堀切を挟んだ北西に延びた尾根のはほぼ水平に続く痩せ尾根上に所在し、第5地点の北西端で尾根は東に屈曲して北へと延びる。報告では尾根に直交する溝で区切られた各墳墓を5A区、5B区、5C区と呼称しているが、明らかにそれぞれ独立した墳墓で有るため、ここではそれぞれ5A墓、5B墓、5C墓と呼ぶこととする。

5A墓は、第5地点の北西端に立地し、5B墓との間に溝を設けて区切っている。自然地形を利用し、「自然地形に特に手を加えた形跡は認められない」と報告されている。平坦面には、尾根の主軸に直交する第2・3主体部と、北へ延びる尾根線の主軸に対して直交する第1主体部、第1・3主体部の隙間に設けられた第4主体部、第2主体部の東に隣接して尾根主軸に平行して設けられる第5主体部の5つの主体部が設けられている。

5B墓は、先述した5A墓と共有する溝と、5C墓と共有する溝によって区切られた平坦面に、尾根の主軸に平行に1基の主体部を設けている。5B・C墓間の溝である1号溝は、5B墓に伴う溝である可能性が指摘されている。

5C墓は、先述した5B墓との間に設けた溝により区切られ、南東側は後世の切り直しによって破壊されているため、区画の状況を知ることはできない。主体部は北西よりの1段低い平坦面に尾根主軸に平行する第2主体部を中心に、その両側に同じく尾根主軸に平

行する第3・4主体部、第2主体部の両小口側に尾根に直交して設けられた第1・5主体部がある。それらの南東側、50cm程の段差の上に尾根主軸に平行する第6主体部が設けられるが、これは5D墓として分離すべきかもしれない。5A～5C墓は出土した土器から弥生後期後葉から末葉の時期が与えられる。

(6) 豊岡市門谷墳墓群第11号墓<sup>(注8)</sup>

門谷墳墓群は豊岡市香住に所在する北東から南西に延びる丘陵尾根上に立地する。

11号墓はこの南北に延びる主尾根の12号墓付近から北西に延びる支尾根上に立地する。報告では、現状の鞍部は後世の削平によって削られた結果であり、墓壙が残存する深さから当時は北西から12号墓に向かって緩やかに傾斜する地形であったと推測する。また、12号墓の境界に所在する溝は、12号墓側を内側とする円弧を描いており、12号墓に属する溝である。平坦面には尾根主軸に直交して4基の主体部が築かれている。11号墓は主体部出土土器から弥生時代後期中葉に築造されたと考えられる。

### 3. 各墳墓の共通点

出土した土器からこれらの墳墓群の築造順を復元すると、門谷第11号墓(弥生時代後期中葉)→妙楽寺第5地点・本井4号墳・大道寺5号墳(古)(弥生時代末)→明石大師山D10東地点・本井3号墳(古墳時代前期)→左坂G5号墳・大道寺5号墳(新)(古墳時代中期末)となり、卓状墓の出現からは遅れるものの、比較的長期間使用されることが分かる。これらの共通点を抽出すると次のとおりとなる。

(1) 墓域の確定原理

最古段階の門谷11号墓は、墓域を区画する溝を持たず、12号墓の溝と北側の急傾斜に伴う傾斜変換線によって区切られた空間を墓域としている。庄内式平行期に築造された妙楽寺例、本井4号墳、大道寺5号墳(古)では、丘陵側縁部に加工を伴わず、尾根線上を僅かに削平して平坦面を設けて、その両端に尾根主軸に直交して溝を設け、墓域を区画している。墓域の長軸方向で一方の端部が急傾斜となる場合は溝を設けない場合もある。古墳時代前期に築造時期が下がるもの(本井3号墳)は盛土を行うものが見られる。

平坦面を人工的に削平するか否かについては、妙楽寺5A・B墓のように削平しないものと、その他のように削平した可能性が高いものがある。造墓原理から言えば妙楽寺5A・B墓以外の墳墓は卓状墓の一種と見なすことができる。妙楽寺5A・B墓は削平を伴わない1群として、左坂墳墓群のような土壙墓の分類の中で類型化する必要があるが、墓域の端部を設けるといふ点では卓状墓との親縁性も見られる。

また、長軸方向に急傾斜に伴う傾斜変換線がある場合はこれを墓域の端部とし、平坦面

が続く地形で墓域の区切りが必要な場合は、尾根に直交する深さ・幅共に50cmを越える溝で区画を行う。この溝は、大風呂南1号墓と2号墓を区画する溝や、西谷3号墓と4号墓を区画する溝と共通の規模・形状である。

(2)主体部の築造原理(図3)

単数もしくは2基までの主体部の場合、最初に設けられる主体部もしくは中心主体部は必ず尾根主軸に平行して設営される。

3基以上の主体部が築造される場合でも、最初に設けられる主体部は尾根主軸に平行して設けられる場合が多い。門谷11号墓、妙楽寺5A墓のように狭小な平坦面に多数の主体部を設ける場合、最初の主体部が尾根主軸に対して直交して設けられている。一方大道寺

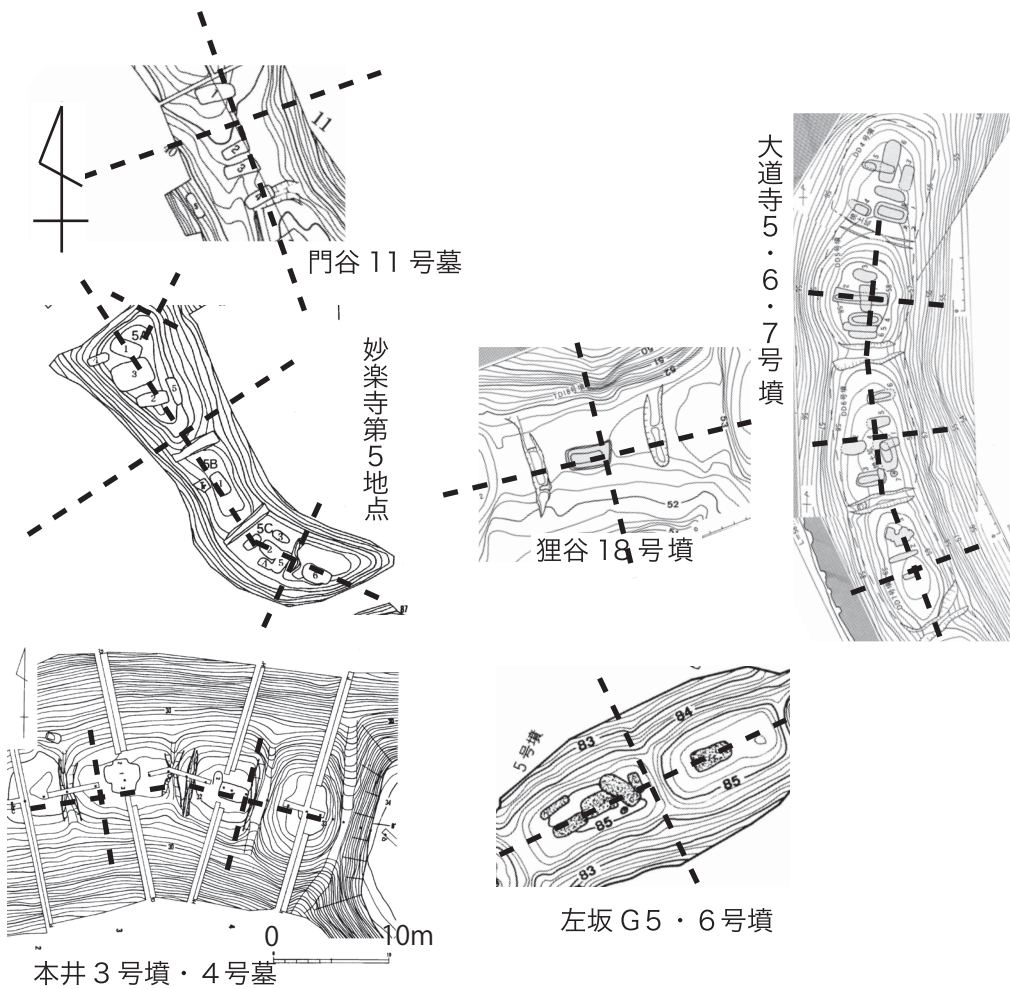


図3 主体部の主軸と尾根の主軸・方位  
(方位は上が北:各報告書より、破線は尾根主軸とその直交する方向)

7号墳は十分な平坦面の広さがありながら、尾根主軸に直交して主体部が設けられている。

妙楽寺5A墓第4主体部・左坂G5号墳第4主体部のように、先行する主体部の隙間に設置される主体部は、尾根の主軸とは無関係に配置される場合がある。

これらを総括すると、本来主体部は尾根主軸に対して平行して設けることを原則とする。中心主体部以外では、残余の平坦面の広さに応じて、平坦面の広さが許すのであれば尾根の主軸に平行に設け、狭ければ尾根の主軸に直交してでも納めるように配置する。さらに追加で主体部を設ける場合は、尾根の主軸とは無関係にしてでも主体部を配置する空間を確保するように配置する。ただし、初めから数多くの主体部を設ける計画の場合、尾根の主軸に直交した主体部の主軸を採る。

いずれの場合においても、古墳時代の葬制について論じられているように、特定の方位を意識したと見られる主体部の設定は見受けられない。

### (3) 墳墓群内での様相

墳墓群内での築造順では、門谷11号墓は、先行する7号墓などに続く時期に築造されるが、妙楽寺・大道寺などでは築造が盛行する時期に築造され、左坂G5号墳は左坂古墳群G支群の最終の時期に築造されている。共通するのは墳墓群の最初期には築造されないということである。

墳墓群内では、尾根上型卓状墓や丘頂型卓状墓と共存し、単独で存在することはない。

## 4. おわりに

丘陵鞍部に立地する墳墓について検討してきたが、卓状墓の新たな類型として類型化すべきものがあることが分かってきた。多くの場合、平坦面を削平により確保するが尾根の側縁部を加工しない。その上で傾斜変換線を墓域の長軸の端部としたり、個々の墳墓の墓域の区画として深さ・幅共に50cmを越える溝を設ける。<sup>(注9)</sup> こうしたものを鞍部型卓状墓と仮に名付け、今後の事例増加を待ちたいと思う。

一方、妙楽寺5A・B墓は平坦面に削平を伴わないため、卓状墓には含めず、土壙墓群とすべきではあるが、溝によって区画するという土壙墓群とは相容れない要素を持っている。こちらは、鞍部型卓状墓の平坦面削平を省略したものという意味で鞍部型卓状墓亜型と仮称し、こちらも事例の増加を待つこととしたい。

(ふくしま・たかゆき = 京都府立山城郷土資料館長)

注1 福島孝行2003「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」『弥生時代の墳墓と祭祀』 京都府埋蔵文化財研究会

福島孝行2010「卓状墓の展開―丹後・但馬・丹波の独自の墓制―」『京都府埋蔵文化財論集』第6集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

福島孝行2018「兵庫県内の弥生時代卓状墓」『ひょうご考古』第15号 兵庫考古学談話会

福島孝行2023「卓状墓の広がり」『考古学と文化史―同志社大学考古学研究室開設70周年記念論集―』（同志社大学考古学シリーズ XⅢ）同志社大学考古学研究室

福島孝行2025「卓状墓の広がり2」『考古学と文化史2』（同志社大学考古学シリーズ XⅣ）同志社大学考古学研究室

注2 加藤晴彦ほか2004『明石大師山古墳群（平成14・15年度調査）・明石城跡（平成15年度調査）』（加悦町文化財調査報告第32集）加悦町教育委員会

注3 今田昇一ほか2001『左坂古墳（墳墓）群G支群』（大宮町文化財調査報告第20集）大宮町教育委員会

注4 福島孝行2001「丹後の古墳時代中・後期の土師器Ⅰ」『京都府埋蔵文化財論集』第4集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注5 増田孝彦ほか1983『京都府遺跡調査報告書』第1冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注6 瀬戸谷 皓ほか1988『本井墳墓群・尼城址』（豊岡市文化財調査報告書第18集）豊岡市教育委員会

注7 中村由美ほか2002『妙楽寺墳墓群』（豊岡市文化財調査報告書第32集）豊岡市教育委員会・豊岡市出土文化財管理センター

注8 中村由美ほか2003『香住門谷遺跡群』（豊岡市文化財調査報告書第34集）豊岡市教育委員会・豊岡市出土文化財管理センター

注9 深さ・幅共に50cmを越える溝は、古天王型台状墓や大風呂南1号墓、大山墳墓群など、弥生時代後期中葉に導入される卓状墓の区画施設である。この溝は尾根上型卓状墓の高位側に設けられる幅20cm前後深さ10cm前後の溝とは異なり、個々の墓域の区画にのみ用いられる。

#### 補注

文中の土器編年は高野陽子 2006「丹後地域－擬凹線文土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センターによる。

